

在籍校名 直方市立直方第三中学校
職・氏名 教諭 中村 芳雄

研 修 報 告 書

このたび、長期派遣研修員として、下記のとおり研修をしましたので報告いたします。

記

1 研修種別

D 福岡県教育センター研修員

2 主題研修について

研究主題 和歌を読み味わう生徒を育てる中学校第3学年国語科学習指導
—感動の中心を吟味する単元構成を通して—

(1) 研究のねらい

ア 課題の背景

令和3年度全国学力・学習状況調査では、考えの形成において「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつこと」に課題があると指摘されている。また、平成28年中央教育審議会答申においては、「言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である」とされている。そこで、古典に親しんだり、古典の表現を味わったりして、古典に表れている古人のものの見方や考え方について自分の考えを深めることのできる生徒の育成が求められていると考え、本主題を設定した。

イ 研究の目的

中学校第3学年国語科「読むこと」の学習指導において、和歌を読み味わう生徒を育てるために、感動の中心を吟味する単元構成の有効性を究明する。

ウ 研究の仮説

中学校第3学年国語科「読むこと」の学習指導において、感動の中心を吟味する単元構成を設定することにより、和歌の感動の中心からイメージを広げて短歌を詠んだり、友達と考えを交流したりすることで和歌についての考えをもつことができるため、和歌を読み味わう生徒が育つだろう。

(2) 研究の構想

ア 主題の説明

(7) 主題について

「和歌」は、形式によって短歌や長歌、旋頭歌などに分けられ、現代でも親しまれている文学の一つである。その中でも、本研究では、五句三十一音の形式で詠まれているもののうち、平安時代や鎌倉時代に詠まれたものを「和歌」と呼ぶ。古人は、和歌を通して相手に思いを伝えたり、季節感や感性を表したりしてきた。そのため、和歌には、その時代に生きた人々のものの見方や考え方が色濃く反映されている。「和歌を読み味わう」とは、和歌の内容や表現、歴史的背景から和歌に詠まれた世界を捉え、自分の世界と重ねながら和歌を読み、和歌についての考えを深めることである。

そこで、本研究では和歌を読み味わう生徒を、次の姿で捉える。

和歌中の語や表現に着目して和歌に詠まれた世界を深め、和歌に立ち返りながら古人のものの見方や考え方を捉え、和歌についての考えを深めることのできる生徒	【思考力、判断力、表現力等】
---	----------------

(イ) 副題について

「感動」とは、作者が和歌に詠み込んだ情景や心情から、読み手が共感したり、心を打たれたりしたことである。「感動の中心」とは、感動が込められていると読み手が考える、和歌中の言葉(箇所)のことである。上野(2018)は、和歌の読み方について、「まず景物と心情を区別し、次に景物に心情がどのように関わっているか考える手順を踏むことで、和歌を鑑賞しやすくなる。」¹⁾と述べている。このことから、和歌に詠まれた情景に託された心情を考える学習をすることで、生徒にとって和歌の内容の理解が深まり、感動の中心が捉えやすくなる。と考える。「吟味する」とは、和歌中の言葉の意味や表現の意図をつかみ、和歌についての考えを形成することである。「感動の中心を吟味する単元構成」とは、単元に、「つかむ」「見直す」「味わう」段階を位置付け、感動の中心を手掛かりに和歌についての考えを広げ、深める単元構成のことである。

まず、「つかむ」段階では、和歌の内容や表現、歴史的背景をもとに、感動の中心を捉えた理由をつかむ。次に、「見直す」段階では、感動の中心からイメージを広げて詠んだ短歌や、その紹介文を交流することで、和歌についての考えを広げる。最後に、「味わう」段階では、感動の中心を手掛かりに、他の和歌や友達の短歌、紹介文を読んで交流することで、和歌についての考えを深める。

以上のように、感動の中心を手掛かりに、和歌に詠まれた世界を捉え、その世界と自分の世界とを重ねながら和歌に表れた古人のものの見方や考え方を捉えることで、和歌についての考えをもつことができるため、和歌を読み味わうことができると考える。

イ 研究の内容

(7) 和歌の感動の中心から短歌を詠む活動

和歌を読み味わうには、生徒が和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねてイメージを広げ、和歌に詠まれた世界を広げたり、深めたりすることが重要である。と考える。そこで、和歌の感動の中心から短歌を詠み、短歌の良さを伝える紹介文を書く活動を「見直す」「味わう」段階に位置付ける。

まず、和歌から短歌を詠む。その際、マッピングを行い、和歌に詠まれた世界と自分の知識や経験とを結び付けたり、広がったイメージを整理したりすることで、短歌にしたい場面の情景や心情を明確にする。次に、短歌の紹介文を書く。和歌の感動の中心から詠まれた短歌には、生徒自身のものの見方や考え方が表れている。と考える。紹介文を書くことで、短歌に込めた自分の心情や表現の工夫などが整理され、古人と自分のものの見方や考え方を比較することができるため、和歌について自分の考えを広げ、深めることができると考える。

(イ) 三つの段階に位置付けた交流活動

和歌についての考えを広げ、深めるために三つの段階に交流活動を位置付ける(表1)。まず、交流活動①では、同じ和歌を選んだ友達と和歌の感動の中心を共有し、和歌の大意を確認することをねらいとする。感動の中心や和歌を読んで感じたことを伝え合ったり、和歌に詠まれたテーマを考えたりすることで、和歌に

表1 交流活動の目的・内容・方法

段階	交流活動	目的	内容	方法
つかむ	①	感動の中心を共有し、和歌の大意を確認する。	感動の中心や和歌を読んで感じたことを共有し、感動の中心をもとに和歌に詠まれたテーマを見いだす。	和歌の部立や歴史的背景、和歌中の言葉に着目する。
見直す	②	同じ和歌を選んだ友達の考えを知る。	和歌に詠まれたテーマについての考えを共有し、評価する。	プレゼンテーションソフトのコメント機能を利用する。
味わう	③	違う和歌を選んだ友達の考えを知る。	複数の和歌やそれをもとにして詠んだ短歌を読み、感じたことを伝え合う。	「和歌を読む→交流する」活動を繰り返し行う。

詠まれた情景や心情が想像でき、感動の中心を捉えた理由や和歌の大意を明確にすることができる。と考える。その際、和歌の部立や歴史的背景、和歌中の言葉に着目することで、生徒が和歌に詠まれた世界を捉えることができると考える。次に、交流活動②では、同じ和歌を選んだ友達の短歌や紹介文を読んで、自分の考えとの違いに気付き、和歌に詠まれた世界のイメージを広げることをねらいとする。そ

の際、紹介文を読んで、短歌で表現した内容や表現の工夫などを共有、評価する。交流活動②を通して、新たな考えに気付いたり、共通点を見つけたりして和歌に詠まれた世界を広げることができる。最後に、交流活動③では、他の和歌を選んだ友達の短歌や紹介文を読んで、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだすことをねらいとする。その際、一首ごとに交流活動を繰り返し行う。複数の和歌や短歌、紹介文を読むことで、和歌に詠まれた世界が深まり、古人のものの見方や考え方を捉えることができる。最後に、交流活動③では、他の和歌を選んだ友達の短歌や紹介文を読んで、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだすことをねらいとする。その際、一首ごとに交流活動を繰り返し行う。複数の和歌や短歌、紹介文を読むことで、和歌に詠まれた世界が深まり、古人のものの見方や考え方を捉えることができる。最後に、交流活動③では、他の和歌を選んだ友達の短歌や紹介文を読んで、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだすことをねらいとする。その際、一首ごとに交流活動を繰り返し行う。複数の和歌や短歌、紹介文を読むことで、和歌に詠まれた世界が深まり、古人のものの見方や考え方を捉えることができる。

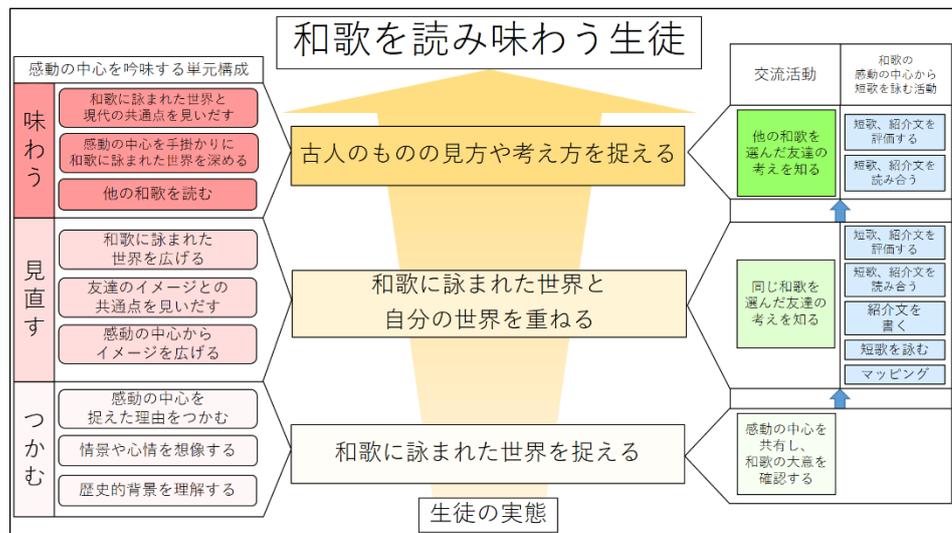


図1 研究構想図

(3) 研究の実際

ア 実証授業の学年及び単元計画

A 市立B 中学校第3 学年C 組、D 組、E 組 105 名

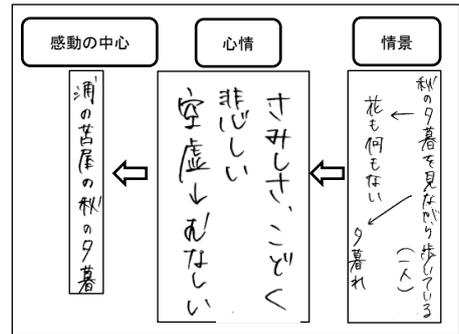
単元	千年の時を越えて、古人の思いを感じよう「君待つと一万葉・古今・新古今」	
目標	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌中の言葉や歴史的背景に着目して和歌を読み、古典の世界に親しむことができる。 【知識及び技能】 ○ 和歌中の言葉や歴史的背景に着目して和歌を読み、和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねながら和歌に詠まれた情景や心情に思いを巡らせ、和歌についての考えを深めることができる。 【思考力、判断力、表現力等】 ○ 和歌の歴史的背景や表現の工夫などに着目して、何度も和歌に立ち返ったり、友達と協働したりして和歌を読み味わおうとする。 【学びに向かう力、人間性等】 	
段階	学習活動 (○) と内容 (・)	具体的な手立て (○) と評価規準 (◆)
つかむ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「古今和歌集仮名序」を音読し単元の学習課題をつかむ。 <ul style="list-style-type: none"> ・情景が心情を表していること ・古人が和歌に込めた思い 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習意欲を喚起させるために、生徒が居住する自治体にある歌碑や句碑を紹介し、和歌や俳句が現代まで親しまれていることを実感させる。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 選んだ和歌を読み、和歌に詠まれた世界を捉える。 <ul style="list-style-type: none"> ・和歌の部立 ・和歌が詠まれた歴史的背景 ・和歌に使用されている表現の技法 ・和歌の感動の中心 ・和歌に詠まれた情景や心情 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌が詠まれた時代の歴史的背景や表現の技法などを理解させるために、資料を提示する。 ○ 和歌に詠まれたテーマを見いださせるために、和歌集の部立を修飾する語をグループで考えさせる。 ◆ 和歌中の言葉を根拠にして、作者が詠んだ情景から、和歌に詠まれた世界を想像することができる。 【思考・判断・表現】
見直す	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねて短歌を詠み、紹介文を書く。 <ul style="list-style-type: none"> ・和歌に詠まれたテーマから想像したこと ・短歌に詠みたい情景や心情 ・友達や自分が詠んだ短歌の良さ ・友達と自分の共通点 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌に詠まれたテーマからイメージを広げさせるために、マッピングを行う。 ○ 和歌についての考えを広げるために、同じ和歌を選んだ友達と交流させる。 ◆ 和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねながら和歌を読み、和歌に詠まれた世界を広げることができる。 【思考・判断・表現】
味わう	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだす。 <ul style="list-style-type: none"> ・和歌に詠まれた世界と現代の共通点 ・古人のものの見方や考え方 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 和歌についての考えを深めさせるために、別の和歌を選んだ友達と交流させる。 ◆ 和歌に詠まれたテーマに沿って、和歌を読み味わおうとしている。 【主体的に学習に取り組む態度】 ◆ 和歌に詠まれた世界と現代の共通点から、古典に表れたものの見方や考え方を理解している。 【知識・技能】

イ 実証授業の実際と考察

(7) 「つかむ」段階(第1、2時)

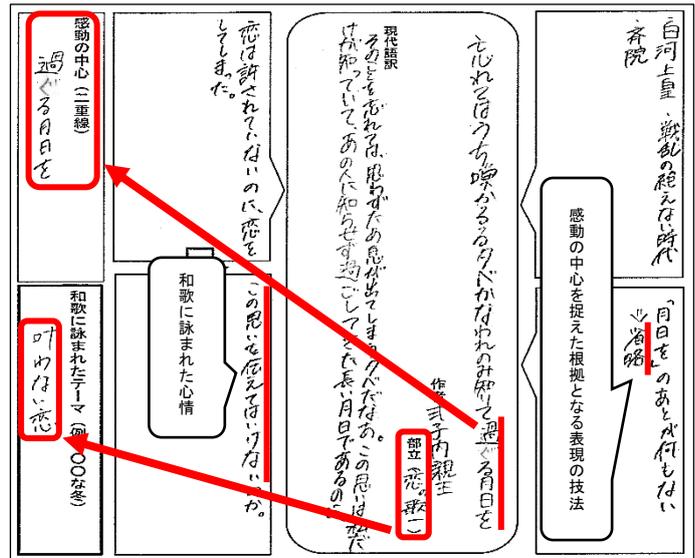
第1時で、古人は心情を情景に託して表現していると学習した。その学習をふまえて、第2時では、

和歌中の言葉や歴史的背景から、感動の中心をつかみ、和歌に詠まれた世界を捉えることをねらいとした。そのために、まず、資料を読んで歴史的背景や表現の技法を確認し、情景や表現の技法などに着目して和歌を読んだ。生徒Aは、和歌に詠まれた「秋の夕暮れを見ながら(作者が一人で)歩いている」情景から作者の「孤独な」心情を捉え、その心情が最も表れていると考えた和歌中の言葉「浦の苦屋の秋の夕暮」を感動の中心とした(資料1)。また、生徒Bは、作者がおかれた状況や和歌に使われている表現の技法である「省略」を根拠に和歌に詠まれた「恋心を伝えてはいけないのか」という心情を捉え、「過ぐる月日を」を感動の中心とした(資料2)。



資料1 情景から心情を想像し、感動の中心を捉えた生徒A

次に、交流活動①を通して、感動の中心や和歌を読んで感じたことを共有し、和歌に詠まれたテーマを見いだした。「和歌の大意を、部立とそれを修飾する語で表すならどのような言葉だと思いますか」という教師の問いかけに対し、生徒Bのグループは、個々が捉えた感動の中心は違っていたが、和歌から想像したことを共有したり、和歌を読み直したりすることで、「叶わない恋」と、和歌に詠まれたテーマを見いだすことができた。この姿は、和歌中の言葉や歴史的背景から、和歌に詠まれた世界を捉えた姿だと判断する。



資料2 生徒Bの記述(第2時)

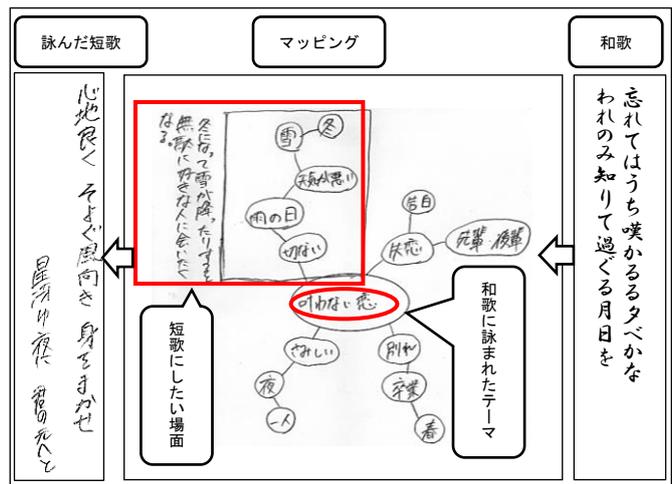
以上のことから、歴史的背景を理解したり、個々が捉えた情景や心情を交流したりすることは、和歌中の言葉や歴史的背景から、感動の中心をつかみ、和歌に詠まれた世界を捉える上で有効であったと考える。

(イ) 「見直す」段階(第3～5時)

「見直す」段階では、和歌に詠まれたテーマからイメージを広げて短歌を詠み、和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねることをねらいとした。

まず、マッピングを行い、和歌に詠まれたテーマからイメージを広げたり、広がったイメージを整理したりして、短歌にしたい場面を決定した。その際、「いつ、だれが、どこで」など内容を具体化し、短文で表現することで、短歌にしたい場面を明確にした。

生徒Bは、「叶わない恋」をテーマに、「冬になって雪が降ると、無駄に好きな人に会いたくなる。」という場面の情景や心情を短歌で表現した(資料3)。



資料3 生徒Bが選んだ和歌、マッピング、詠んだ短歌

生徒Bは「情景から短歌をつくったことで、選んだ和歌の心情がより伝わってきた。」と短歌を詠む活動を振り返った。これは、和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねて短歌を詠むことで、和歌に詠まれた世界を広げることができた姿だと判断する。

そして、和歌に詠まれた世界について自分の考えを整理するために、自分が詠んだ短歌の紹介文を

書いた(資料4)。生徒Bは、短歌の感動の中心を「君の元へと」とし、「冬になりかけの夜に好きな人に会うために必死に駆け出す様子」を短歌で表現したと紹介文に書いた。また、表現の技法の「省略」を用いることで、「その情景や心情が伝わるようにした」と、表現の技法の効果についても整理することができた。

次に、生徒Bは交流活動②で、友達の短歌から「恋愛に向かっていく必死さや、あきらめたいけどあきらめられない気持ち」を想像した。そして、想像した心情と、自分の短歌に詠んだ「家から好きな人に会いに、必死に駆け出していく様子」とを比較して、「恋に必死になっている姿」が共通していることに気付くことができた(資料5)。これは、友達と自分の考えの共通点から、和歌に詠まれた世界について自分の考えを広げた姿だと考える。

最後に、交流活動②の後、再度和歌を読み返した生徒Bは、感動の中心を「過ぐる月日を」から「われのみ知りて」と見直し、和歌に詠まれた世界を「好きになってはいけないのに好きになってしまった切なさ」と捉えた(資料6)。また、第2時で捉えた「叶わない恋の切なさ」だけでなく、作者がおかれている状況をふまえて「恋心を忍ばせる悲しさ」も捉えることができた。これは、同じ和歌を選んだ友達と和歌に詠まれたテーマのイメージを交流し、友達と自分の考えの共通点を見いだしたことで、和歌に詠まれた世界を広げ、和歌に詠まれた世界と自分の世界を重ねることができた姿だと判断する。

以上のことから、和歌の感動の中心から短歌を詠むことは、和歌に詠まれた世界についての考えを広げることができるため、和歌に詠まれた世界と自分の世界とを重ねる上で有効であったと考える。

(4) 「味わう」段階(第6時)

「味わう」段階では、古人のものの見方や考え方を捉えるために、感動の中心を手掛かりに別の和歌を複数読んだ。その際、交流活動③で、同じ和歌を選んだ友達とグループで和歌を読み、感じたことを共有した。

生徒は交流活動③で、和歌や友達が詠んだ短歌、短歌の紹介文を読んで気付いたことをメモし、感じたことを一首ごとに共有しながら、和歌に詠まれた世界を深めた。交流活動③の後、生徒は、恋に悩んだり季節の変化を楽しんだりする古人の姿などを想像し、現代にも通ずる心情に気付くことができた。生徒Bは、「春が来たことにワクワクしている」というメモから、「季節の変わり目や何気ない日常が美しいと感じている」と古人の季節感を捉えることができた(資料7)。また、「思ったことを和歌にすることで、人には伝えられない自分の気持ちを表現している。」と古人が和歌を詠む意義も捉えることができた。この姿は、感動の中心を手掛かりにしながら複数の和歌を読むことで、和歌に詠まれた世界と現代の共通点に気付き、和歌についての考えを深めた姿だと判断する。

以上のことから、和歌や短歌、紹介文を読んで感じたことを交流することは、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだすことができるため、古人のものの見方や考え方を捉える上で有効であったと考える。

- ・短歌に詠んだ情景や心情
- ・表現の技法とその効果
- ・和歌と短歌の関連

資料4 紹介文の内容例

この短歌は、冬になりかけの夜に好きな人に会いたくなくて家から好きな人に会いに必死に駆け出しに行く様子を表現しました。

生徒Bが短歌に詠んだ心情を紹介する文

友達の短歌や紹介文を読んで気付いたこと

頼れぬとわかっていてもミミミとあてを突く向かって必死に駆け出したりとあきらめられない気持ちを表現

資料5 生徒Bの紹介文と友達の短歌との共通点

元の短歌では好きになれずはじけぬの好きになれず切なさがわかれていて

感動の中心を捉えなおした根拠

感動の中心

★もとにした和歌を読み味わおう!

感動の中心

われのみ知りて

和歌に詠まれた世界を広げ深めた記述

自分以外誰も知らない切ない恋心が表現されている。忘れたという所から忘れたくないという心が私だけが知っているという悲しみがあつた。前は叶わぬ恋の切なさだけだと思っていたけど恋を忍ばせる悲しさもあることがわかった。

資料6 生徒Bの記述(第5時)

メモ	和歌
春が来たことにワクワクしている。	袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ

者の心と、季節の変わり目何気ない日常が美しいと感じる。思っていたことを和歌にすることで自分の気持ちを表現している。

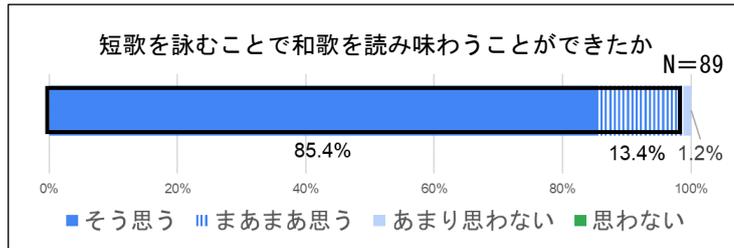
えられぬという気持ちを表現している。

複数の和歌を読んで気付いたメモから見出した古人のものの見方や考え方、古人が和歌を詠む意義

資料7 第6時の生徒Bの記述

(4) 全体考察

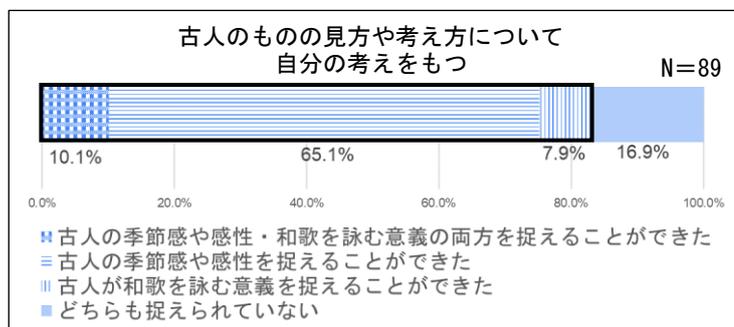
資料8は、授業終了後に行ったアンケート調査の結果である。「短歌を詠むことで、和歌を読み味わうことができたか。」という項目に対して、「そう思う」と答えた生徒が85.4%、「まあまあ思う」と答えた生徒が13.4%と、ほぼすべての生徒が短歌を詠むことの有効性を感じていることが分かる。



資料8 生徒アンケートの結果

「感動の中心から作者の思いとの共通点を考えることで、作者の思いを詳しく想像することができた。」「同じテーマの和歌でも友達と比べると全く違っていておもしろい。」などの記述から、生徒は、短歌を詠む楽しさを実感しながら、和歌についての考えを深めることができたと考えられる。このことから、和歌に詠まれたテーマからイメージを広げて短歌を詠むことは、和歌に詠まれた世界を広げ、深める上で有効であったと判断する。

資料9は、第6時の記述から、古人のものの見方や考え方を捉えることができたかを分析したものである。古人の季節感や感性、古人が和歌を詠む意義の両方を捉えることができた生徒が10.1%、どちらかを捉えることができた生徒が73%と、全体の約83%の生徒が、古人のものの見方や考え方についての考えをもつことができていくことが分かる。また、「和歌を詠むことで素直な自分の気持ちを表現した。」「何気ない日常や好きな人への思いなど、和歌は古人にとって自由に表現できる場である。」などの記述から、生徒は複数の和歌を読むことを通して、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見だし、古人は何のために和歌を詠んだのか、和歌をどのようなものと捉えていたかを想像することができたと判断する。これは、和歌や配付された資料、友達が詠んだ短歌や紹介文を読むことで、古人と自分のものの見方や考え方を比較しながら和歌を読み味わうことができたからだと考える。一方で、友達が詠んだ短歌を読み味わうことに専念してしまい、和歌に表れた古人のものの見方や考え方を想像することができなかった生徒がいた。そのため、和歌を読み味わうために短歌と紹介文を読む、という目的をもって活動できているかを確認する場が必要であったと考える。



資料9 第6時の生徒の記述の内訳

和歌を詠むことで素直な自分の気持ちを表現した。」「何気ない日常や好きな人への思いなど、和歌は古人にとって自由に表現できる場である。」などの記述から、生徒は複数の和歌を読むことを通して、和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見だし、古人は何のために和歌を詠んだのか、和歌をどのようなものと捉えていたかを想像することができたと判断する。これは、和歌や配付された資料、友達が詠んだ短歌や紹介文を読むことで、古人と自分のものの見方や考え方を比較しながら和歌を読み味わうことができたからだと考える。一方で、友達が詠んだ短歌を読み味わうことに専念してしまい、和歌に表れた古人のものの見方や考え方を想像することができなかった生徒がいた。そのため、和歌を読み味わうために短歌と紹介文を読む、という目的をもって活動できているかを確認する場が必要であったと考える。

(5) 研究の成果と今後の課題

ア 研究の成果

- 和歌の感動の中心から短歌を詠んだり、交流活動を各段階に位置付けたりすることで、感動の中心を手掛かりにしながら和歌に詠まれた世界と現代の共通点を見いだすことができたため、感動の中心を吟味する単元構成の有効性を究明することができた。

イ 今後の課題

- 複数の和歌に詠まれた世界と自分の世界との共通点から古人のものの見方や考え方を捉え、和歌についての考えをより深めるために、「味わう」段階で、自分と友達が捉えた感動の中心や捉えた理由を共有する場が必要であると考えられる。

<引用文献>

- 1) 上野 友寛他(2018) 「中学校における和歌の読み方の獲得を目指した授業実践
—「景物+心情」の抒情様式の理解を通して— 福島大学人間発達文化学類論集第27号 p. 83

<参考文献>

- ・ 府川 源一郎他(2004) 『認識力を育てる「書き換え」学習 中学校・高校編』 東洋館出版社

【添付資料】

○ 実証授業で取り扱った和歌一覧

古今和歌集
袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ
秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを
道の辺に清水流るる柳かげしばしとてこそ立ち止まりつれ
見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮
忘れてはうち嘆かるる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を

紀貫之
藤原敏行
小野小町
西行法師
藤原定家
式子内親王

○ 和歌を読み味わった生徒の記述例

古人の価値観を自分のものの見方や考え方と比較して記述できている。

昔も今も季節の変わり目は士びしを感したり、ワクワクしたりして、考え方がほとんど変わっていないなと思った。
作者は直挿心情をかかなくても心情が伝わるように擬人法などの表現の工夫をしておもしろいなと思った。

今も昔も感じたことはいあまり変わらないうち思った。(同じ)
自然と見て聞いたりやなれたり、虫や寒さを感じ、季節のわたりと感したり、相手も想っているのに伝わりないうち思った。
たぶん共通点を見つけたことかできた。昔は写真とか残せるものがなかったため、和歌に残したと思った。

古人が和歌を詠む意義について自分の考えを記述している。

○ 歴史的背景が分かる資料(一部)

詞書とその現代語訳

「千年の時を越えて、古人の思いを感じよう！」 参考資料⑥

『忘れてはうち嘆かるる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を 式子内親王』

詞書(和歌に詠まれた事情を説明する短い文)
【原文】
百首歌の中に忍恋を。
【現代語訳】
百首の歌を詠む中に、忍恋という題で詠みました。

現代語訳
そのことを忘れては、思わずため息が出てしまう夕べだなあ。この思いは私だけが知っていて、あの人に知らせず過して来た長い月日であるのに。

○ 作者について
・後白河天皇の皇女(娘)。
・もの悲しく繊細で洗練された作風の女性歌人。
・加茂神社の斎院(祭祀を行う女性)をしていた。その任期中も和歌の腕を磨き続けた。

○ 『加茂神社の斎院』について
京都の加茂神社の祭祀(神や祖先を祭ること)に仕える女性のこと。斎院は清浄を求められたため、未婚者である必要があった。斎院の任が終われば結婚しても問題ないが、式子内親王を含む、ほとんどの斎院経験者は生涯独身だった。

玉の緒よ たえなば絶えね ながらへば
忍ぶることの 弱りもぞする

出典 新古今和歌集 1034番
式子内親王
後白河天皇の皇女、加茂神社の斎院(神に仕える女性、天皇家の未婚の女性から選ばれた)を詠じた。父は藤原定家(藤原定家の父である皇太子鳥羽天皇の弟)に和歌を学んだ。

この歌の内容
私の命よ、絶えなば絶えてしまおうがいわ、このまま生き続けたい、この気持ちを隠しておせなくて、恋心がはれてしまおうかしらなから。

この歌の場面
「忍恋」という題で詠まれた歌。恋愛を禁じられた身でありながら恋をしてしまったらを詠んだ歌。作者の恋の相手は、権中納言定家(藤原定家)ともいわれている。

用字解説
※「玉の緒」は玉の結び目。玉の緒は玉の結び目。玉の緒は玉の結び目。玉の緒は玉の結び目。

作者が同じテーマで詠んだ別の和歌の解説

作者が置かれている状況の説明

○ 生徒Aが作成した短歌とその紹介文、友達のコメント

選んだ和歌との関連

表現の技法について

短歌に詠んだ情景や心情

短歌や紹介文を読んで友達が感じたこと

さんの短歌を読んで感じたことは、文末を途中で終わらせるところの作り方が上手だと思いました。また元の短歌の恋をしてはいけないという約束の中にしてしまった必死さがしっくり伝わってきました。また心地よくそよ風向きのところで冬になりかけの涼しい感じが伝わって来ました。そして好きな人に会いたくなって飛び出す様子がすごく想像できました。

詠んだ短歌の魅力の紹介

この短歌は、冬になりかけの夜に好きな人に会いたくなって家から好きな人に会いに必死に駆け出しに行く様子を表しました。

この短歌の表現の工夫は、文末を途中で終わらせる省略を使ったことです。省略を使うことで駆け出している必死さが伝わるようにしました。

元の短歌では、恋をしてはいけないのにしてしまった切なさや悲しさが表現されていたので、短歌を作るときに恋に必死になっている様子を表しました。

もとにした和歌

忘れてはうち嘆かるる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を
式子内親王

詠んだ短歌

心地良くそよ風向き身をまかせ星冴ゆ夜に君の元へと

友達が詠んだ短歌の情景や心情を想像することができている。

選んだ和歌の作者の心情を想像することができている。

○ 生徒Aが参考にした友達の短歌とその紹介文、生徒Aが書いたコメント

短歌や紹介文を読んで友達が感じたこと

さんの短歌は、好きな人に振り向いてもらえず自分の恋は報われないとわかっているのに寒い冬にふと好きな人のことを考えてしまう切なさやふと考えてしまうほど好きな人のことが好きなのが伝わってきて本当にすごいと思いました。短歌の終わりに「・・・」をつけているので切なさやかなってほしいという願いがより深く伝わってきました。恋への必死さがすごく伝わってきたので本当にすごく工夫がされていてすごいと思いました。

詠んだ短歌の魅力の紹介

この短歌は寒い冬の夜一人で好きな人との出来事や行動などを考えてしまっ一人でネガティブに考えたり報われぬ恋だと思いつ込んでしまっ一人で落ち込む様子を表しました。

この和歌に込めた表現の工夫は文の終わりに『∴』をつけることで途中で終わらせる感じを表現しました。

もとにした和歌

忘れてはうち嘆かるる夕べかなわれのみ知りて過ぐる月日を
式子内親王

詠んだ短歌

寒い夜ふと考える君のこと報われぬとわかっていても…

生徒Aが友達の短歌や紹介文を読んで、自分の考えの参考にした点や表現の技法の効果について考えたこと。